



神津の学びや

たくましく しなやかに



伊丹市立神津小学校

校長 米田 博一

令和7年6月20日号

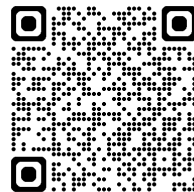
「非認知能力を育てる5つのかわり」について(2)

前号に続いて今号では、では、「5つのかわり」のうち、残りの3つについて書いてみます。

【参考】

神津の学びや

5月30日号



自己選択・自己決定の尊重

子どものやることや持つものなど、よかれと思ってつい親が口を出したり決めてしまったりしていませんか。子どもが好きだと感じることや、やってみたいと思ったことは、頭から否定せずに尊重する姿勢を大切にすることで、子どもが自分で考え、判断し、行動する力につながります。

しつけをする上で、守らせるべきルールはあります。例えば、スマホやゲームの使用時間です。子どもに自由に決めさせるとやりたい放題になってしまうので、そういうわけにはいきません。かといって親が一方的にルールを決めてしまうとそれはやらされたものになってしまいます。そういう時は、子どもの思いを聞きながら、話し合いて親子ともが納得できるルールを決めることで、そのルールは子どもが自分で決めたものとなり、守る責任が生まれます。

自分で決めるのが苦手な子は、まずは「あなたは どうしたいの?」「どちらがいい?」などと問いかけることで、日常生活の中での小さな自己決定を積み重ねられるようにしてあげてください。

自己決定をしていくことで、うまくいかなかったことでも人のせいせず、自分の行動に責任を持てるようになります。自分の人生や行動を自分で決めていくことができれば、きっとそれは自分らしく生きていくことにつながっていくのではないかと思います。

結果より過程を大切にした指導

ある実験での話です。子どもたちを2つのグループにわけテストを実施します。一方のグループでは、「8問も正解してる!すごいね!頭いい!」と結果や才能をほめ、もう一方のグループは「8問正解!難しい問題だけど、あきらめずに頑張ったね」と努力過程を褒めます。その後、子どもたちに新しい問題を見せ、「新しい問題に挑戦する」か「同じ問題を解く」かを選んでもらうと、結果(能力)を褒められた子どもたちは難しい問題を避け、簡単な問題を選ぶようになり、努力過程を褒められた子どもたちは、自分を高める「新しい問題」に果敢に挑戦するようになったそうです。この実験を続けると、努力過程を褒められた子どもたちは、新しい問題に果敢にチャレンジし、できることを増やしていきます。逆に、結果を褒められた子どもたちは、挑戦を避け、その結果、新しい能力を獲得することができません。最終的には、努力過程を褒められた子どもたちの方が大きく能力を向上させ、スタートで均等だった成績に大きな差が生まれたそうです。

今の結果は子どもたちの将来の結果ではありません。子どもたちの頑張ろうとする過程を大切にすることで、将来の結果につながるチャレンジする姿勢を育てたいものですね。

先回りし過ぎず見守るかわり(失敗経験を大切にする)

大人は多くの経験を積んできていて、どうすればうまくいかがわかるので、子どものやることについて口を出してしまいがちです。また、我が子のことを大切に思うあまり、失敗させないように、つい先回りしてやってあげたり、すぐに手助けしてしまったりしてしまうこともあると思います。しかし、そうやって先回りして、大人が子どもの行動に手や口を出し続けていると、子どもの主体性が育たず、自分で考え判断し、行動する力は育ちません。

子どもは小さな失敗を重ねることで「失敗してもやり直せる」ということを学んでいくものです。命に関わることや大きな怪我につながることは配慮する必要がありますが、できるだけ子ども自身の力で行動できるよう見守ってあげてほしいと思います。

また、自分で試行錯誤し、つかみとった成功は、子どもにとってただうれしいだけではない大きな自信につながります。大人はとても忙しいですし、見ていてハラハラすることもあるかもしれませんが、できるかぎり待つ。根気強く見守る。そんな姿勢を意識していきたいですね。